油絵の手ほどきを受ける。東京藝術大学美術学部藝術学科在学中の 1956 年、第 33 回春陽会展に初入選。同年から春陽会研究所で岡鹿之助や三雲祥之助らの指導を受ける。1962 年政府給費学生として渡仏。1964 年帰国後、春陽会会員となり、現在まで同会で活躍している。

河久保正名　かわくぼ・まさな　生没年不詳
神奈川県生まれ。1876 年に国沢新九郎主宰の彰技堂で洋画を学んだ。1885〜1895 年にかけて勧画学舎を開き、丸山晩霞や板谷波山が学ぶ。1890 年代に大蔵省印刷局に勤めながら、明治美術会や日月会に参加。1900 年パリ万国博覧会へ出品し、翌年にはトモエ会の結成に参加。印刷局退職後は日光に転居し、土産絵を描いて晩年を送る。太平洋画会の第 5 回展（1906 年）に《杉蔭》を、第 6 回展（1908 年）に《杉の森》を出品しているが、これらは日光の風景だったのかもしれない。

川島理一郎　かわしま・りいちろう　1886-1971
現在の足利市に生まれる。1908 年から 2 年間米国の美術学校やデザイン学校で学んだ後、1911 年に渡仏、アカデミー・コラロッシなどで学ぶ。1913 年サロン・ドートンヌに日本人として初入選。1919 年に帰国するが、その後もしばしば欧州を旅し、1922 年にはサロン・ドートンヌ会員になっている。1926 年国画創作協会第二部の創立に同人として参加。戦後日本芸術院会員となり、日展でも活躍。日光に取材した個展をたびたび開いている。

小杉未醒／放菴　こすぎ・みせい／ほうあん　1881-1964
現在の栃木県日光市に生まれる。本名は国太郎。五百城文哉の内弟子となる。1899 年小山正太郎主宰の不同舎で学ぶ。この頃〈未醒〉と号し、太平洋画会に参加。1904 年日露戦争に記者として従軍。欧州留学から帰国した 1913 年、再興された日本美術院に同人として参加し洋画部を牽引。1919 年まで出品したのち、1920 年洋画部同人らと連袂脱退。このメンバーを中心に 1922 年春陽会を結成し、以後、同会を主な発表の場とする。1923 年から〈放庵〉の号を併用し始め、1933 年末〈放菴〉へ改号し、制作は日本画が中心になっていく。1945 年新潟県新赤倉の別荘に疎開し、この地に永住する。

住谷磐根　すみや・いわね　1902-1997
群馬県に生まれる。1921 年日本水彩画会展に入選後上京し、川端画学校で学ぶ。1923 年二科展にイワノフ・スミヤビッチという名で入選しているが、村山和義・尾形亀之介・柳瀬正夢らと前衛美術団体マヴォの結成に参加したことにより入選を取り下げた経歴を持つ。のち牧野虎雄に師事し、槐樹社、独立美術協会、大調和会などで活躍した。

田辺　至　たなべ・いたる　1886-1968
東京に生まれる。東京美術学校西洋画科で黒田清輝に師事。在学中の 1907 年文展に初入選し、以後入選を重ねる。1910 年に卒業後、同校研究科に進学。その後助手、助教を経て、1922 年に文部省在外研究員として 2 年間欧米。帰国後 1928 年に東京美術学校教授に就任した。1944 年に退官してからは特定の美術団体には属さず、鎌倉で地域の美術振興に尽力した。

田辺三重松　たなべ・みえまつ　1897-1971
北海道に生まれる。函館商業学校在学中に美術部を立ち上げるなど美術への関心が高く、独習する。1916 年卒業後、家業を継ぎつつ道展に出品。1928 年には呉服商を廃して小学校教員となり、同年二科展に初入選。1943 年同会会員に推挙された。戦後、1945 年に同志たちと行動美術協会、また全道美術協会を設立。道内の美術界での後進指導にも大きく貢献した。

田淵　保　たぶち・たもつ　生没年不詳
現在の和歌山県海草郡に生まれる。1891 年五姓田義松の内弟子になった後、原田直次郎主宰の鍾美館で学ぶ。明治美術会に参加した後、1908 年第 7 回トモエ会展に《日光写生》を出品した記録が残る。岸田劉生「新古細句銀座通」や三宅克己『思ひ出づるまま』のなかで、日光で土産絵を描き、銀座の荒井真画堂に付き合いがあった画家として田淵の名が登場する。

古橋義朗　ふるはし・よしろう　1924-2006
現在の日光市に生まれる。日光に来た春日部たすくとの出会いから、水彩画を描くようになる。終戦後、谷田貝憲介を中心に清晃会から発展した青光会に参加する。水彩画と油彩画を区別せず展示し、油彩画と勝負できる水彩画を描いていく舞台として、1950 年から旺玄会に出品を続ける。南画に通じる独特の感性で自然を捉え直したその水彩画は、多くの後進に影響を与えた。

丸山晩霞　まるやま・ばんか　1867-1942
現在の長野県東御市に生まれる。河久保正名主宰の勧画学舎や、本多錦吉郎主宰の彰技堂で洋画を学ぶ。明治後年に日光に滞在し、五百城文哉や小杉未醒と共に土産画を描く。日光の画商・鬼平と親しく、のちに弟子の小山周次を寄寓させている。1900 年河合新蔵らと渡米し、水彩画展を開き大成功を収める。1913 年日本水彩画会を創立し、中心となって活躍を続けた。

三宅克己　みやけ・こっき　1874-1954
徳島市助任町に生まれる。1891 年に来日したイギリス人画家ジョン・ヴァーレー・ジュニアの展覧会に感銘を受け、水彩画家を志す。1892 年原田直次郎の鍾美館で学ぶ。1896 年渡米費用を稼ぐため、日光を始め各地で販売用の水彩画を描いた。1897 年米英に留学。1912 年光風会を中沢弘光らと結成。文展・帝展にも作品を発表し、帝展審査員も務めた。

吉澤儀造　よしさわ・ぎぞう　1869-1903
現在の三重県亀山市関町に生まれる。1893 年不同舎へ入門し、小山正太郎に師事した。1899 年小杉放菴の不同舎入門にあたり付添人となっており、同年初冬に《日光の初雪》を描いている。明治美術会や太平洋画会に出品していたが、1902 年に体調をくずし、翌年欧米留学の願いを果たせないまま 35 歳の若さで没した。

吉田あぐり　よしだ・あぐり　1889-1945
洋画家吉田嘉三郎の四女として福岡県に生まれる。4 歳頃から次姉ふじをと共に絵の指導を受ける。義兄の吉田博に連れられ、風景の鉛筆デッサンで研鑽を積み、10 歳頃から水彩画を描き始める。その後、梅田家に嫁ぎ刺繍で生業を立てたが、40 代までは時折水彩画を描いていたという。息子 2 人を若くして結核で亡くしている。1945 年 3 月 10 日の東京大空襲に遭い逝去。

吉田　博　よしだ・ひろし　1876-1950
福岡県久留米市に生まれる。1894 年に小山正太郎の主宰する不同舎へ入門。1899 年中川八郎と渡米し、翌年にかけて米国各地で二人展を開催し大成功を収めた。1902 年明治美術会を解消発展させた太平洋画会を設立。1936 年日本山岳画協会を設立。1947 年太平洋画会会長となった。

ロバート・ウィアー・アラン　Robert Weir ALLAN　1851-1942
イギリスの水彩画家。1852 年スコットランドのグラスゴーに生まれる。パリのアカデミー・ジュリアンでアレクサンドル・カバネルらに学ぶ。1880 年代からロンドンに定住。世界各地を広く旅行し、1907 年に来日して作品をのこしている。

アルフレッド・イースト　Sir Alfred EAST　1844-1913
イギリスのノーサンブトンシャー州に生まれる。グラスゴー美術学校で学んだのち、ロイヤル・アカデミーで活躍。ロンドンのファイン・アート・ソサエティからの依頼により、1889 年に来日。翌年「日本の風景画と素描」と題する個展をロンドンで開催した。

ロバート・チャールズ・ゴフ　Robert Charles GOFF　1837-1922
イギリス併合時代のアイルランド島ダブリンに生まれる。イタリアやエジプトなど旅をよくし、1877 年に来日している。翌年陸軍を退役後、画業に専念する。都市や海の風景画を得意とし、ロンドンのロイヤル・アカデミーに出品。1890 年代にイタリアへ移り、第一次世界大戦中にスイスへ移住した。

ヘレン・ハイド　Helen HYDE　1868-1919
女性版画家。ニューヨークに生まれる。1891 年から 3 年間パリでラファエル・コランやフェリックス・レガメーに学び、とくにレガメーの影響から日本に強い関心をもつ。1899 年に来日。アーネスト・フェノロサの勧めで木版画を始める。版元の小林文七の協力のもと、日本人の彫師や刷師と共同作業で次々作品が生み出す。一時帰国後、1902 年に再来日し、1914 年に最終帰国するまで日本に住んで制作活動を続けた。

クレメント・パーマー　Clement PALMER　1857-1952
イギリスの建築家。構造設計者のアーサー・ターナーとパーマー＆ターナー建築有限会社を設立し、香港や上海を拠点に活動。1921〜1923 年にかけて香港上海銀行ビルを始めとする多くの銀行を設計した。

アルフレッド・パーソンズ　Alfred William PARSONS　1847-1920
イギリスのサマセット州に生まれる。ロイヤル・アカデミーの水彩画家として活躍。田園風景や植物、庭園を描くことを得意とし、植物関係の書籍にも多くの挿絵を描いている。1892 年に来日。日本各地を旅行し、まだ西洋画科が設けられていなかった東京美術学校で個展を開いた。

ウォルター・ティンデル　Walter Frederic Roofe TYNDALE　1855-1943
イギリス人夫妻の子としてベルギーに生まれる。水彩画家、イラストレーターとして、主にイギリスで活躍した。モロッコ、中東、シチリア島など旅をよくし、1900 年代に来日。庭園を描くことが目的であったようで、1910 年に出版した紀行文『JAPAN AND THE JAPANESE』や、1912 年に刊行された友人の著書『JAPANESE GARDENS』には、日本旅行時に描かれた、庭園を中心とする美しい挿絵が多数挿入されている。

ジョン・ヴァーレー・ジュニア　John VARLEY, Jr　1850-1933
イギリスの画家一族の家系に生まれる。1876〜1895 年にかけてロイヤル・アカデミーに出品。エジプトやインド、セイロンを旅し、1890 年に来日。1891 年東京の慈恵医院で開いた個展で、日本各地の風景や景物を描いた作品を展観する。1892 年の第 4 回明治美術会展に水彩画を特別出品。それまで日本では風景画を《〜の景》などと題してきたが、この時の目録で始めて《風景》の表記が現れた。

日光の今と昔をひとつ飛び

旅する日光

Kosugi Hoan Museum of Art, Nikko
小杉放菴記念日光美術館

2023 年
4 月 22 日［土］
〜
6 月 25 日［日］

出品目録・作品作家解説

旅する放菴

01030081
小杉未醒（放菴）《スエズ運河の岸のアラビヤ人》
1913（大正 2）年作　第 1 回日本水彩画展
紙／水彩　32.0×21.0 cm　平成 23 年度購入
解説：小杉未醒（放菴）は欧州遊学のため、日本郵船・賀茂丸で 1912（大正元）年 12 月に出国しました。本作は、翌月フランスへ向かうためスエズ運河を通過したときに描かれたスケッチです。サイン下の「2.1」は大正 2（1913）年 1 月を意味します。フランス到着後、本作を日本へ送ったようで、同年 6 月に開催された第 1 回日本水彩画展に出品されていることが、雑誌『みづゑ』7 月号から確認できます。

01030045
小杉未醒（放菴）《琉球風景》
1916（大正 5）年作　紙／水彩　32.5×23.5 cm　平成 17 年度寄贈

01010131
小杉未醒（放菴）《石切山》
1916（大正 5）年作　三都大家新作画幅展
絹本着色，軸装　114.9×41.0 cm　平成 22 年度購入
解説：1916（大正 5）年 12 月の「三都大家新作画幅展覧会」出品作。小杉未醒（放菴）はこの頃、石切をテーマとした作品を何度か描いており、主な作品に、第 2 回日本美術院習作展出品の水彩画《石割り》（1916 年、所在不明）や、出光美術館の《秋色山水長巻》（1920 年）があります。これらは、1916 年に 2 ヶ月滞在した沖縄で取材した石切場の体験が基になったもので、本作もやはり同様のものと考えられます。横山大観ら日本美術院の日本画家たちに影響を与えた、弧状の輪郭線から内側に向かってぼかしをつける小杉の「片ぼかし」は、沖縄旅行を取材した作品で多用されていますが、やはり本作でも構築的な石切場の表現などに用いられています。小杉にとっての片ぼかしは、平面的・装飾的な画面のなかで、違和感のないヴォリューム感を表現する効果がありました。また、単純化された構図や波の表現、明瞭な色彩をもつこれらの作品には、日本美術院同人であった今村紫紅からの影響もうかがえます。

寄託
小杉未醒（放菴）《小樽客遊記念帖》
1916（大正 5）年作　紙本墨画淡彩，画帖　15.0×10.7 cm　個人蔵　令和 4 年度寄託
解説：旅好きな小杉放菴は、旅先のスケッチで気に入ったものを画帖に仕立てていました。本作は小杉が友人の画家長谷川昇の故郷である小樽を旅行した時に、記念に描いた画帖です。内容は小樽ではなく、沖縄や大分県の耶馬溪など、これまでの旅行で印象に残っている風景を記憶のままに描いたものと考えられます。

01030059
小杉未醒（放菴）《水郷図》
1917（大正 6）年作　絹／水彩，額装　29.0×21.5 cm　平成 12 年度購入
解説：小杉未醒（放菴）は、1917（大正 6）年 8 月、友人である画家の満谷国四郎、彫刻家の藤井浩祐と、水郷潮来・佐原（現在の茨城県潮来市〜千葉県香取市）を旅しました。このとき小杉は、「真菰草 潮来出じまの色町の 昼静かにも通り雨すれ」「板の橋 十二あるてふあるやとて 数えて見しか加藤洲の船」（「水郷十二首」『画人行旅』所収）といった、いくつかの短歌を残しています。戦後ほとんど埋め立てられてしまいましたが、かつて潮来には縦横に張り巡らされた水路があり、それぞれの島に建つ家々や、家と田の間は、笹のような形のサッパ舟で往来していました。また、常陸利根川と与田浦に挟まれた加藤洲には、家々を繋ぐ 12 の木橋が架けられ、これをサッパ舟で巡る十二橋巡りは、現在も観光名物となっています。前者の短歌は、「潮来出島のまこもの中であやめ咲くとはしおらしや」の船頭唄で知られる潮来節を意識したものでしょう。かつては色街として栄えた潮来・佐原も、このときには寂れつつあったようです。本作はこの旅のなかで、かつての水郷に想いをはせた作品と考えられます。潮来出島を象徴するアヤメが手前に印象深く描かれていることに注目です。

01040027
小杉未醒（放菴）《呉越帖》
1924（大正 13）年作　紙／コンテ・水彩，画帖　28.5×39.5 cm　平成 30 年度寄贈
解説：全 8 図。1924（大正 13）年の中国旅行中に描いたスケッチを、小杉自ら 1927（昭和 2）年にまとめた画帖です。

01020007
小杉未醒（放菴）《泉》
1925（大正 14）年頃作　カンヴァス／油彩　179.0×363.0 cm　平成 4 年度寄贈

01020020
小杉放庵《厳島風景》
1933（昭和 8）年作
カンヴァス／油彩　71.0×89.0 cm　平成 11 年度寄贈［大木コレクション］
解説：小杉放菴の日記から、友人であった広島県知事・湯澤三千男（栃木県鹿沼市出身）の依頼により、1933（昭和 8）年 5 月に広島県・宮島（厳島）を取材して描かれたことがわかっています。日記には、平清盛が松を植えたと伝わる平松公園で写生したと記されており、現在は平松茶屋というお茶屋さんがあります。ここに立つと、平松茶屋から厳島神社、千畳閣、三重塔を見下ろすことが出来、絵とよく似た構図になります。昔よりも手前がうっそうとして見えにくくなっていますが、《厳島風景》にかなり近い構図です。現地の方の証言によれば、本作の構図になるのは、この場所しか無いとのこと。もう少し高い地点からの眺めのようにも見えるのは、海の面積を眼で見えるより広く美しく描こうとした、放菴の工夫だったのかもしれません。

01040028
小杉放菴《朝鮮南北》
1936（昭和 11）年・1939（昭和 14）年作
紙／コンテ，画帖　27.0×23.0 cm　平成 30 年度寄贈
解説：1936（昭和 11）年および 1939（昭和 14）年に、日本統治時代の朝鮮（現在の北朝鮮および韓国）を旅行した時のスケッチ全 35 点をまとめた画帖です。これらを眺めてみると、小杉が現地の風俗、壮大な山々が生み出す景観、古寺の風景などに関心を持っていたことがよくわかります。

杉並木から門前町へ

保管
作者不詳《日光山惣絵図》
1716〜1729（享保元〜14）年頃作
紙本着色，軸装　日光市教育委員会蔵　平成 11 年度保管
解説：江戸時代、徳川家康が眠る日光東照宮、三代将軍家光の廟所である大猷院で執行される例祭には、通常は将軍の名代（代理）が参詣に行っていました。しかし家康・家光の年忌や、幕政の転換期には将軍自ら参詣に行くことがありました。これは「日光社参」と呼ばれ、二代秀忠から十二代家慶までの間（1617〜1843 年）に、計 17 回実施された記録が残っています。日光社参が実施される際には、警固の目的や民衆の関心に応じて、日光山や日光道中に関する様々な絵図が作成されました。本図もそうした絵図のひとつと推測されていますが、1729（享保 14）年に萩垣面に建設された興雲律院が描かれていないことから、八代将軍徳川吉宗の時代（1716〜1745 年）の前半に描かれたものと考えられています。徳川吉宗は 1728（享保 13）年 4 月 13〜21 日にかけて、日光社参を実施しており、これにあわせて作図されたものなのかもしれません。

寄託
植田孟縉『日光山志』
1837（天保 8）年刊　個人蔵　平成 11 年度寄託
解説：1837（天保 8）年に刊行された全 5 巻からなる『日光山志』は、火消役として日光に十数回勤務した八王子千人同心（日光奉行配下で警備、防火、消火を担当した武士たち）の組頭・植田孟縉（1757-1843）が、勤務中に見聞きした情報を綴った地理書で、日光に関する古典的名著として知られています。植田はこれ以前に、本書の原型となる稿本を書いていますが、その頃の植田は身分が低く、無名の画家にわずかな挿絵を頼むことしか出来なかったため、書名に絵図とは記さず、『山志』と題したのでした。しかし文政年間（1818〜1830 年）に植田の名が地誌の編纂者として知られるようになったことで、渡辺崋山、高久靄厓、椿椿山といった著名な絵師たちの挿絵が入った『日光山志』が刊行されました。絵師のなかには、椿山のように、わざわざ日光まで写生に赴いた者もいたようで、『日光山志』は近世美術史にとっても、たいへん重要な資料となっています。

資料
絵葉書
明治後期〜昭和初期　紙／印刷　個人蔵
解説：1871（明治 4）年、日本に郵便制度が設立。1873（明治 6）年 12 月から政府が

官製ハガキを発行するようになり、1890 年代後半（明治 30 年前後）には、手彩色の写真など、小さな絵柄を裏面に印刷したハガキも発行されるようになりました。1900（明治 33）年になると、民間による私製ハガキの発行が認められ、数年の内に多種多様の絵ハガキが店先に並ぶようになり、絵ハガキブームが到来します。日光、箱根、熱海などの観光地では、その土地の風景や風俗写真が印刷された絵ハガキが手軽なお土産として、膨大な枚数が明治後期から昭和初期にかけて発行されていきました。それらのなかには、当時の景観や風俗をいまに伝える貴重な情報がつまっています。画家によるデザイン製豊かな絵ハガキも人気を博し、日光では水彩画家として著名な丸山晩霞（○に「晩」のサインがある）などの絵ハガキを見出だすことが出来ます。これらもまた、その画家を知るうえで、貴重な作品の一つです。

01020074
入江　観《杉山の道》
1985（昭和 60）年作
九人の会展　カンヴァス／油彩　100.0×72.7 cm　平成 29 年度寄贈

01030074
田淵　保《今市図》
1911（明治 44）年作　紙／水彩　31.0×50.0 cm　平成 21 年度購入
解説：田淵保は和歌山県出身。岸田劉生や三宅克己の証言により、日光で土産絵を描いていたことがわかっている画家です。彼の土産絵は、社寺だけでなく、町並みや茶屋など、明治の日光の人々の生活空間を描いている点が大きな特徴です。本作は、日光街道と例幣使街道の分岐点に祀られている石造地蔵菩薩坐像（通称・追分け地蔵尊）周辺の、活気ある情景を描いた水彩画。画面右下の「1911」という年記により、明治 44 年の風景であることがわかります。『栃木県営業便覧』（1907 年）の地図と照らし合わせてみると、この頃、追分け地蔵尊前には飲食店や雑貨屋があり、賑わっていた様子が伝わってきます。「たばこ」や「仁丹」といった看板まで描きこまれており、今市地区の当時の風俗を知る貴重な資料でもあります。

01030061
Y.ITO《日光杉並木》
紙／水彩　49.0×32.6 cm　平成 14 年度購入

01030015
G.yokouchi《杉並木》
紙／水彩　49.5×33.2 cm　平成 8 年度寄贈

01030077
吉田あぐり《日光杉並木》
紙／水彩　48.5×31.5 cm　平成 21 年度購入

01030033
吉田　博《杉並木》
1894-1899（明治 27-32）年頃作　紙／水彩　50.2×68.2 cm　平成 9 年度購入

01030012
三宅克己《日光》
1896（明治 29）年作　紙／水彩　29.4×49.4 cm　平成 8 年度寄贈

0103yt0001
吉澤儀造《日光の初雪》
1899（明治 32）年作　紙／水彩　29.5×49.5 cm　平成 8 年度寄贈

01030062
田淵　保《日光駅前風景》
明治後期　紙／水彩　32.8×49.6 cm　平成 14 年度寄贈
解説：画面左側に「小西支店」の看板がある店を確認できることから、現在のＪＲ日光駅前の風景を描いていることがわかります。小西旅館の支店で、土産物などを販売していた小西支店は、明治期から変わらず現在地で営業していたことが、『栃木県営業便覧』（1907 年）からも確認できます。

01030008
鈴木清一《日光》
紙／水彩　50.3×32.7 cm　平成 8 年度寄贈

外国人が見た日光

01030075
ジョン・ヴァーレー・ジュニア《神山旅館》
1890（明治 23）年作　紙／水彩　27.0×36.7 cm　平成 21 年度購入

01030078
アルフレッド・パーソンズ《日光の小堂》
1892（明治 25）年頃　紙／水彩　28.4×46.4 cm　平成 22 年度購入
解説：場所は、小杉放菴記念日光美術館からも近い、輪王寺の四本龍寺観音堂。観音堂は 807（大同２）年に千手観音を祀る堂として創建、1684（貞享元）年の焼失後に再建されました。明治期の観音堂を描いた作品は、日光を描いた絵画作品のなかでも、とても珍しいものです。アルフレッド・パーソンズの日本滞在記『NOTES IN JAPAN（日本記）』（London, 1896）に図版が掲載されていることから、1892（明治 25）年の日光滞在中に描かれた作品と確認できます。翌年にロンドンのファイン・アート・ソサエティで開かれたパーソンズの個展「日本の風景と花の水彩画」の出品目録に、《A Small Temple at Nikko, Gongen Sama. July》とあり、本作がこれに該当する可能性があります。

資料
アルフレッド・パーソンズ『NOTES IN JAPAN（日本記）』
1896（明治 29）年刊　London : Osgood McIlvaine　小杉放菴記念日光美術館蔵

01030050
クレメント・パーマー《神橋》
1890（明治 23）年作　紙／水彩　20.1×30.1 cm　平成 10 年度購入

01030052
ヘレン・ハイド《日光》
1908（明治 41）年作　紙／水彩　49.4×27.2 cm　平成 10 年度購入
解説：二荒山神社別宮・滝尾神社へ続く参道の、二社一寺浄水場の横あたりを描いていると思われます。ヘレン・ハイドは米国ニューヨーク州生まれの女性画家です。1891～94 年にかけて、パリでラファエル・コランや、フェリックス・レガメーらに学び、とくに日本研究者として著名だったレガメーの影響から、日本に強い関心をもちました。1899（明治 32）年に初来日して日本画や木版画を学び、1902（明治 35）年に再来日。1914（大正３）年に最終帰国するまで日本に住んで制作を続けました。この間、夏にはよく日光で僧坊を借りて過ごしていたそうです。

寄託
ロバート・コロネル・ゴフ《東照宮・唐門》
1877（明治 10）年頃作　カンヴァス／油彩　91.5×61.5 cm　個人蔵　平成 29 年度寄託
解説：ロバート・コロネル・ゴフは、1837 年にイギリスによる併合時代のアイルランド島ダブリンに生まれ、1922 年にスイスのヴヴェイにて没した風景画家です。本作は、1877 年にゴフが来日した際に描いたと考えられる作品。画面右手から差し込む日差しの陰影が、日光東照宮の唐門の絢爛さを引き立てています。門をくぐる白い衣を着た僧侶の姿や、門の前に集う着物を着た参拝者の姿も丁寧に描かれており、外国人による日本の風俗への高い関心がうかがえます。

01030093
ロバート・ウィアー・アラン《陽明門》
1907（明治 40）年作　紙／水彩　74.0×51.5 cm　平成 27 年度購入

01030044
作者不詳《NIKKO MAGUNJI TEMPLE（浄光寺）》
紙／水彩　24.9×35.2 cm　平成 9 年度寄贈
解説：匠町にある浄光寺境内から、山門と鐘楼がある付近を描いています。浄光寺は、日光開山の祖・勝道上人が日光一山の菩提寺として仏岩（山内）に創設した往生院を起源とします。1640（寛永 17）年に現在地に移転し、この地の菩提寺となりました。描かれている梵鐘は、室町時代の 1459（長禄３）年に権律師源観が山内の本宮権現に奉納したもので、栃木県指定文化財に指定されている、日光山最古の梵鐘です。本作は、画面左下に「NIKKO MAGUNJI TEMPLE」とあるのみで、作者を示すサインがありません。おそらく作者は外国人で、“ 憾満ヶ淵ちかくの寺 ” を意味する言葉を書こうとしたものの、その発音が聞き取りづらく、このような表記になったのではないかと推測されます。

01030051
アルフレッド・イースト《中禅寺》
1889（明治 22）年頃作　紙／水彩　26.2×36.8 cm　平成 10 年度購入

資料
ウォルター・ティンデル『JAPAN AND THE JAPANESE（日本と日本人）』
1910（明治 43）年刊　London : Methuen & Co., ltd.　小杉放菴記念日光美術館蔵

資料
バシル・テイラー夫人『JAPANESE GARDENS（日本の庭園）』
1928 年再版（初版は 1912 年）
London : Methuen & Co., ltd.　小杉放菴記念日光美術館蔵

社寺の美に酔う

01030072
石川欽一郎《神橋》
1900-1910（明治 33-43）年頃作　紙／水彩　33.0×49.6 cm　平成 20 年度購入

01030056
丸山晩霞《東照宮・鳥居》
1900（明治 33）年頃作　紙／水彩　25.6×34.5 cm　平成 12 年度購入

01030091
河久保正名《輪王寺・三仏堂内部》
明治後期作　紙／水彩　49.8×33.4 cm　平成 26 年度購入

01030087
河久保正名《大猷院・拝殿内部》
明治後期作　紙／水彩　49.8×33.3 cm　平成 23 年度購入

01030016
N.HISANO《東照宮・神楽殿と上社務所》
紙／水彩　33.8×51.4 cm　平成 23 年度購入

01030024
小杉未醒（放菴）《東照宮・陽明門と鼓楼》
1900 年代作　紙／水彩　33.5×50.4 cm　平成 9 年度購入

美しき奥日光

01030076
石井柏亭《中禅寺湖畔》
1908（明治 41）年作　紙／水彩　34.5×25.5 cm　平成 21 年度購入

01040004
川島理一郎《奥日光　湯ノ湖》
紙／パステル　42.5×60.0 cm　平成 9 年度購入

01020038
住谷磐根《奥日光湯元附近》
1936（昭和 11）年作　カンヴァス／油彩　33.2×23.8 cm　平成 14 年度購入

01020041
我妻英策《蓼沼》
1979（昭和 54）年作　取材地：湯元・蓼ノ湖（蓼沼）
カンヴァス／油彩　37.9×45.5 cm　平成 15 年度寄贈

寄託
川島理一郎《大谷川の秋》
紙／コンテ　24.0×17.0 cm　平成 25 年度寄託

01040009
川島理一郎《男体山の春》
紙／鉛筆　15.3×24.7 cm　平成 20 年度購入

0102-NPAoJ22
田辺三重松《中禅寺湖》
1957（昭和 32）年作　カンヴァス／油彩　80.3×65.2 cm　平成 24 年度寄贈

01010132
小杉放庵《関東第一山》
1933（昭和８）年頃作　紙本墨画淡彩，軸装　45.4×51.4 cm　平成 22 年度購入
書き下し：かけまくも　かしこきものは雲の海に　浮びて見ゆる朝の山かも
解説：口に出すのもおそれおおい、雲海に浮かぶ朝の山よ――。小杉の『旅窓読本』（1936 年刊）の「日光山記」という随筆にも収められている、自作の短歌。小杉が愛してやまなかった故郷・日光の男体山を北側から描いた、1930 年代前半の作品と考えられます。おそらく太郎山か大真名子山に登山したときに見た男体山の姿ではないでしょうか。

01030069
古橋義朗《雲かゝる男体》
1984（昭和 59）年作　第 50 回旺玄会展
紙／水彩　104.3×69.2 cm　平成 18 年度寄贈

01020057
吉田　博《中禅寺湖畔》
1910-1920 年代作　カンヴァス／油彩　101.8×68.4 cm　平成 20 年度購入

01020078
入江　観《湖畔晩夏》
2015（平成 27）年作　第 92 回春陽会展　取材地：中禅寺湖畔 菖蒲ヶ浜
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm　平成 29 年度寄贈

01020077
入江　観《双稜冠雪》
2012（平成 24）年作　第 89 回春陽会展　取材地：女峰山・赤薙山
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm　平成 29 年度寄贈

01020076
入江　観《懐郷の山》
2010（平成 22）年作　第 87 回春陽会展　取材地：赤薙山
カンヴァス／油彩　130.3×193.9 cm　平成 29 年度寄贈

0102-NPAoJ21
田辺　至《秋の戦場ヶ原》
1932（昭和７）年頃作　国立公園洋画展
カンヴァス／油彩　65.2×80.3 cm　平成 24 年度寄贈

01030088
作者不詳《風景》
紙／水彩　33.6×50.5 cm　平成 23 年度寄贈
解説：旧蔵者によれば、日光の男体山、太郎山と並ぶ日光三山のひとつ、女峰山の八風という場所を描いたものと伝わっています。八風は女峰山のガレ場（砕石の堆積した斜面）として登山者に知られる場所で、日当たりが良いため、暖かい季節には様々な花が咲いているといいます。作者のサインは判読困難ですが、丸山晩霞や吉田博のような、登山家でもある画家だったのでしょうか。本作は、日光市内でながく呉服店を営んでいた旧家に保存されていました。裏面には、明治期の日光で地図の発行や土産用の絵画を販売していた画商鬼平金四郎（現在は羊羹屋）が扱った商品であることを示すスタンプが捺されています。小杉放菴記念日光美術館が収蔵している、日光の社寺を中心とする水彩画コレクションの多くは、海外から里帰りしたもので、本作のようにずっと地元に残っていたという作品は珍しいものです。

作家解説

我妻英策　あづま・えいさく　1925-2003
現在の日光市今市に生まれる。古河電気工業株式会社を退職後、日光本町郵便局長を務めた。日光市在住の画家達による青光会に参加。1959 年小野崎草樹とグループ陀を結成。同年に旺玄会会員。またこの年から二紀会に 10 年連続入選し同人となる。1960 年代後半に絵画グループ VOA にも参加した。

石井柏亭　いしい・はくてい　1882-1958
東京に生まれる。本名は満吉。浅井忠や中村不折に洋画を学ぶ。1907 年山本鼎らと美術誌『方寸』を創刊し、翌年「パンの会」に加わる。日光にはこの年の夏に初めて訪れ、『ホトトギス』誌に、日光に取材した挿絵を５点寄せる。また、湯元に入る途中に見かけた山火事後の山を描いた《火の跡》と、湯滝の滝壷近くから見た風景《男体山》という２点の油彩画を、同年の第２回文展に出品し、前者で入選している。後者は落選したものの、小杉放菴は〈僕はあれを見て何だか日光が明るくなった様な気がした〉（『方寸』２巻８号）と、日光の新たな魅力を引き出したと高く評価した。渡欧後の 1914 年に二科会を創立。1935 年帝国美術院会員。1936 年一水会を創立。1937 年帝国芸術院会員。1949 年日展運営会理事などを歴任した。

石川欽一郎　いしかわ・きんいちろう　1871-1945
現在の静岡市に生まれる。大蔵省印刷局に勤務し水彩画を独習。1892 年明治美術会に出品する。1901 年トモエ会を結成。随筆「緑窓閑話 日光の一夏」（『みづゑ』1910 年）のなかで、〈数年前〉の〈東宮殿下は妃殿下と御一緒に日光滞在〉した時機に日光で過ごしたと語っており、1901～1906 年頃日光に滞在していたと推測される。また、輪王寺境内で写生をしていたところ、僧から写生・撮影には許可が必要で、日本人なら一週間３円、外国人なら一週間 10 円を納める必要があると注意されたこと、日光町の画商・鬼平が山内へ水彩画の売り子を出していたことなど、今となっては貴重な情報を知ることが出来る。1908 年からアルフレッド・イーストと文通を交わし、水彩画の助言をもらう。1913 年日本水彩画会の創立に参加。1922 年に初渡欧し、帰国後は光風会、日本水彩画会の重鎮として活躍した。

入江　観　いりえ・かん　1935～
現在の日光市に生まれる。日光町立第一国民学校（現・市立日光小学校）で谷田貝憲介から